

論文

岡山博愛会における アリス・ペター・アダムスの訪問看護活動 ——セツルメント事業との関連を通して——

徳川 早知子

〔抄録〕

岡山博愛会の濫觴は1891年アリス・ペター・アダムスが来日し、岡山で活動を始めた時に始まる。アダムスは、キリスト教の宣教のみでなく教育・福祉・医療等の多方面にわたる足跡を残した。彼女は来日以来、岡山市最大のスラムであった花畑において、帰国する1936年まで45年間多岐にわたる事業を展開した。それは当時、劣悪な状況に置かれていた地区での住民の生活に関する改善事業であった。

本稿執筆の目的は、アダムスが地区住民の家庭を訪ね、岡山博愛会セツルメントの発展と共にアダムスの訪問看護が如何に展開されていったのか、そして如何なる影響を与えたのか、それについて考察していくことにある。

研究方法としては『岡山博愛会75年史 みわざのあと』『連帯時報』『アダムス女史一夕話』『岡山博愛会沿革誌』『岡山博愛会100年史』等を用いて、その歴史的記述からアダムスにおける訪問看護活動の軌跡を辿った。

キーワード：訪問看護、セツルメント、地域改革、アリス・ペター・アダムス、岡山博愛会

はじめに

研究の背景と目的—問題の所在と先行研究

現代の少子高齢社会にあって、たとえ病気や障害を持っていても地域で安心して医療・介護を受け暮らしていける地域社会の構築に向けて、訪問看護活動のニーズはこれまでに増大している。わが国における戦前期訪問看護活動については、近代看護発達の歴史の中で、通史

的に記述されているものもあるが、詳細な研究はなされていない。社会福祉の課題として訪問看護事業のその前史については、未だ明らかにされていない。

キリスト教宣教の目的で来日したアリス・ペター・アダムスによる岡山博愛会セツルメントワークに見られる訪問看護活動も、わが国訪問看護の一つの流れと捉えることが出来る。

岡山博愛会の濫觴（らんしょう）は1891（明治24）年、アリス・ペター・アダムス（以下、アダムスと略記）が来日し、岡山で活動を始めた時に始まる。彼女は1891年5月、アメリカン・ボード宣教師として来日以来、岡山市最大のスラムであった花畑において、帰国する1936年まで45年間、多岐にわたる事業を展開した。それは当時、劣悪な状況に置かれていた地区での住民の生活に関しての改善事業である。具体的には、日々の生活を送っている住民、とりわけ児童、看取る人のいない病人、貧しい家庭を訪ね、時には彼らの中に住いを移し、昼夜、花畑の人びととの共生にあった。彼女の活動は「日本のジェーンアダムス」(Jane Addams of Japan)¹⁾とも呼ばれるほど、キリスト教に依拠した献身的な活動を展開した。

さしあたり、先行研究を見ておこう。アダムスと岡山博愛会については、守屋茂『近代岡山県社会事業史』（岡山県社会事業史刊行会、1960）、更井良夫『岡山県の生んだ4人の社会事業家（留岡幸助 石井十次 山室軍平 アリス・ペター・アダムス）』（日本基督教社会事業同盟、1973）、赤松力『近代日本における社会事業の展開過程－岡山県の事例を中心に』（お茶の水書房、1990）等の著書がある。これらにはアダムスや博愛会についての概略が記されているが、その事業の重要性から見てそれほど多くはない。一方それと関連して博愛会の節目の年代において出版された年史（記念誌）は史料としても価値がある。それは『岡山博愛会沿革誌』および『岡山博愛会記念誌』が見られる。坂本（1931）、赤澤（1941）、更井・更井美子（1966）、更井（1991）により編纂出版されている。いずれも施設と共にあった人達により研究、編纂されている。

ところで本論文での課題である訪問看護を視点に当てた研究は、セツルメント史の一角として評価はされるものの、ほとんど見当たらない。筆者は2001年、「日本訪問看護制度前史の研究－岡山におけるアリス・ペター・アダムスとその活動」²⁾として発表した。筆者の管見の限り、前掲論文執筆後既に20年を経た現在においても、新たな研究を見出すことが困難であった。近代日本の訪問看護における歴史研究については、看護史という視点のみならず、社会福祉史の視点が重要であり、中でもアダムスによる岡山博愛会での事業展開の記述については、その後の新たな文献収集により、その概略を記述するだけではなく、アダムスの事業の今日的意義が抽出できるのではないかと気付かされる。

これまでアダムスや岡山博愛会の研究の進捗を妨げてきた要因として、アダムスに関する史料が僅少であった。すなわち、アダムスは岡山博愛会の事業を託した更井良夫³⁾に「自分の伝記は決して出版しないように、博愛会にはそんな予算はない筈だ」と指示して、花畑在任中に執筆された数十冊に及んだ彼女の日記を、アダムスは帰国の前に総て焼却してしまった⁴⁾。

本稿執筆の目的はアダムスが看護婦の資格を持たない初期においても、ハケットが記述しているように⁵⁾、身寄りのない病人を訪ね、訪問看護活動を実践しているが、施療所が開所した後も、絶えず花畑の軒の崩れかかった小さな家々を訪ね、訪問看護を行った。岡山博愛会セツルメントの発展と共に、アダムスの訪問看護が如何に展開されていったのか、そして如何なる影響を与えたのか、それを考察していくことにある。訪問看護の歴史を考察していくことは、今後の社会福祉を考えていく上で、きわめて重要な視点であると考えている。

研究方法はとして、『アダムス女史一夕話』『岡山博愛会100年史』『岡山博愛会沿革誌』『みわざのあと』『四季のしらせ』『連帯時報』等を用いて、その歴史的記述からアダムスの活動を振り返り、訪問看護および訪問活動の実態にせまり、岡山博愛会の事業をアダムスと関連させながら、訪問看護活動の軌跡をたどり考察していく。

第1章 アリス・ペター・アダムスと博愛会

ニューヨークの「ヘンリー・ストリート・セツルメント」⁶⁾が発足する2年前の1891年に、アダムスはアメリカン・ボードの宣教師として来日し、岡山市花畑で基督教の宣教と共に社会事業活動を行っていった。ここで、アメリカンボード宣教師アダムスの来日に至った経緯について、アダムスの従兄であるジェームス・ホレス・ペター (Dr. James H. Pettee) の影響が大きい。彼は1873年頃来日し、79年に岡山東山に来住して岡山ミッション・ステーションを中心に基督教布教活動を行っていた。アダムスの来日への契機となったのは、ペター博士が休暇のために本国に帰り、アダムスに宣教師となって日本で伝道することを奨めたことが、『アダムス女史一夕話』に記述されている⁷⁾。アダムスは基督教の伝道により、社会事業への関心を持ち、日本で宣教師として布教活動をする希望のあることをペター博士に語った。ペター博士は、「神の教えを説き、神の愛を実行することこそ眞の社会事業であると熱心に説き勧め、貧民のために働くつもりなれば岡山に来たれ彼處には澤山の貧民がいる」と話した⁸⁾。アダムスはペター博士の所信である「伝道を離れた社会事業はありえない」とする社会事業への想いを自分のものとして、日本伝道の決意を固めた。

岡山博愛会第三代会長更井良夫は、1991年アダムスについて、「学校の教師であったアダムスは宣教師として来日時、スラムの救済事業のリーダーになる計画はなかった。彼女は故郷の女学校で数学、動物学、植物学を教え、余暇で(副業的に)社会事業をする心積もりでいたらしい」⁹⁾と記している。更井は岡山花畑地区におけるアダムスの活動は、シカゴのジェーン・アダムスがアメリカにおけるセツルメントの創始者であるように、わが国セツルメントの創始者はアリス・ペター・アダムスとしている。また、わが国セツルメントの始まりを、1897年にキングスレー館を設立した片山潜や有隣園の創設者である大森兵蔵と安仁子などが挙げられる場合もある。アダムスは花畑において明治の早い時期から教育、人心の教化を図り、よく家庭

を訪問し、ある時は共に住い、迫った危機から病人や子供を救った。そして、自立と向上を人々に教えた。

1891年、アダムスが来岡早々、花畑地域で粗暴に振る舞う子供達と関わり、いつかその心に神様を宿すことができると、アダムスは心に深く、彼らのことを留めた。子供達は自分たちのことを心にかけてくれるアダムスに関心を示し、日曜学校に集まってきた。子供達の住んでいる花畑の地域について、アダムスは『アダムス女史一夕話』¹⁰⁾で次のように語っている。「花畑は今のご覧の通り立派な所と変わっていますが、私の参りました当時は大変な所でございました。戸数は約七百、人口は彼是三千三、四百もあつたかと思ひます。勿論悪い所ばかりではありませんでした。最も悪かつたのが、現在博愛会のある付近で此所は全くルンペンの巢といつてよい有様でした」¹¹⁾。1905（明治38）年発行の『四季のしらせ』¹²⁾には「岡山に流行する諸病伝染病は先づ此の地に発するを常とす云々」と載せ、病気の多い不衛生な所と印象付けている。また、『アダムス女史一夕話』では「彼らの住居は幽暗、穢陋、一見不快の感を起さしむるに足り、彼らの周囲は鬭争、仇恨、詐欺、暴慢、貪婪、矜誇、詭譎、不慈、不孝、不清、忘恩、誘瀆等一切恐るべき戦慄すべき罪惡が跋扈跳梁している」¹³⁾と、あらゆる形の悪の形容詞を用いて評している。花畑はこのような集りであつたから一定の職業を持つ者は稀で、大抵物貰い、物拾いでその中に少数の紡績職工が交つている」とアダムスは記している。更に、賭博は常習で夜昼の別なく行われていること。全くの治外法権区域をなしていたものであつたことについても語り、アダムスは「しかし、私は幸いに信用を得ていたので、自由に出入りをしていました」¹⁴⁾と記述している。

第2章 セツルメント活動をめぐって—アダムスの花畑での事業の軌跡—

セツルメントから出発し、そこから訪問看護の活動を展開した事例の一つにこの岡山博愛会の取り組みも考えていかなければならないケースではないだろうか。もちろん規模や活動に於いては比較にならないかもしれないが、その初発の思想や活動については多くのヒントが存在しているように思われるのである。

訪問看護がアダムスのセツルメント事業にどう関わっているのか。博愛会施療院でどのような訪問看護が行われたのか、沿革誌および事業に至るまでの間、アダムスは日曜学校の開設、1896年、花畑尋常小学校の開設などを進めている。アダムスの事業を少し追ってみよう。もちろんこの点について筆者は先に挙げた前記の「日本訪問看護制度前史の研究—岡山におけるアリス・ペター・アダムスとその活動—」において具体的に記述してきた。

問題はこうしたセツルメント事業の中から訪問看護事業への関係が指摘出来るのである。こうした視点は戦前の訪問看護の歴史を叙述して行くとき、岡山博愛会の特徴として浮かび上がってくる。以下に記すように岡山博愛会の事業は多岐にわたっている。その事業について見て

行くと、先ず、アダムスのセツルメント事業は日曜学校から始められた。「米国より岡山へ参りまして第一に馴染みを作ったのは子供達でした」¹⁵⁾とアダムスも記しているように、彼女が岡山で最初に着手した伝道活動は教育活動であった。アダムスは、1891年のクリスマスに東山にある従兄のペター宣教師宅で子供たちを集めてクリスマスパーティーを開いた。アダムスは少しずつ花畑の子供達や花畑の人達の信頼を得ていった。

1896年9月、アダムスは小野田元を学校の責任者¹⁶⁾として、花畑尋常小学校開設に向けて準備をなし、市役所に設立を願い出た。10月には許可が下り、生徒募集が始められた。不就学児童の家庭を訪問して入学を勧めた。しかし親の中には、アダムスに「子供はお前のいう通り学校に入れたのだから、その代り子供が儲けていただけの金を分けて生活を助けてくれ」¹⁷⁾などと言うものもあった。「アダムスはその不心得を論したが、この人たちには中々了解がいかんかった」とも語っている¹⁸⁾。小学校においてもアダムスの家庭訪問はなされた。「賭博常習者の家庭」の項を見ると、「柳井太吉(仮名)は5人の家族で子供3人を抱えていたのですが、一定の職業を持つではなく、毎日毎日賭博に耽って家を顧みる暇がありませんでした。(中略)子供2人は博愛会尋常小学校に入れて教育していたのですが、中途からよく欠席したり風邪に罹ったりしますので、之には何かの理由があるに違いないと思い、或る日家庭を訪問して調べて見ました。すると太吉が賭博で負けると質入れする物が無くなった今日この頃では残しておいた1,2枚の汚れた布団までも質入れしている事が判りました。賭博で勝てば質より受け出し、負ければ質入れするという具合で子供も之が為よく風邪に罹り学校も欠席するのです」¹⁹⁾と、アダムスは記述した。

アダムスは1902年、小学校の児童のために校内に浴室を設け、児童への清潔習慣形成のために生活指導を開始した。アダムスは、『アダムス女史一夕話』に子供達と風呂について「小学校生徒の為に1週間2回宛て焚きました。子供を入浴させるのに私は随分困りました。洋服の尻をまくり上げ、一度に2人宛て洗ってやりましたが、初めの内は子供の垢と、体臭の為気絶する思いをしたことも度々でございました。然し是もいつとはなく慣れてまいりました。斯様にして子供は大分綺麗に代ってまいりましたが、大人は依然として風呂に入らないものが相当にありましたので第2期計画として大人の風呂を思い立ち1905年から1912年まで「施し風呂」として無料浴場を地区の人たちに開放しました」²⁰⁾。「施し風呂」の事業は、住民の疾病予防と衛生教育の面で地域の健康水準を向上させたと思われる。またこれらの事業はアダムスの隣保事業に住民の関心を向けさせた。

アダムスは1902年12月に『花畑夜学会』を設立した。設立にあたりアダムスは、この事業の目的を「娘達の風紀を守り、婦人としての身だしなみと高い教養を与えることである」とした。この事業は1909年になると『裁縫夜学会』と名称を変更して裁縫教育を中心に生花・茶道・料理・家政・修身教育が行われるようになった。

幼稚園と保育園，託児所

アダムスは、子供を良い習慣になじませ、教化していくためには、1年でも早く教育を始めた方が良結果が得られるとの考えのもとに、1906（明治39）年には小学校に幼稚園を付設した。この幼稚園は1908年6月、都合により廃止している²¹⁾。アダムスは幼稚園運営のための経費がなくなりまして中止致しましたと、記している²²⁾。この年、7月アダムスは1908年の来岡以来2回目の帰国をした。更井はこの間の事情を「アダムスは休暇で帰米中に在米の日本人を訪問し、保育園建築資金を募金行脚し金5,736円66銭を与えられたので2階建木造園舎を建築して保育園事業を始める（1910年）ことになった²³⁾と記述している。岡山博愛会では保育に欠ける子供たちを無料で預かって保育することになった。アダムスは幼い子供への教育を通して、人々の生活意識の向上改善を行うことに努力した。この貧民街においてはすべての人が働かなければならない。昼間働かなければならない多くの母親達には小さい子どもがあるという事は大问题であった。アダムスは幼稚園と保育園を開始し、これらの小さい子ども達に昼間保育の健康なる場所を与えた。当時から百年以上たっているが、博愛会保育園では次のような手順で、働くこの地域の母親から乳幼児を預かっていた。

保育方法は以下の6項目が保母によって守られていた

- ①洗面其の他身辺を清潔にする
- ②保育園備え付けの衣服に着替えさせる
- ③幼稚園式教養を教える
- ④病気になった場合は、施療院で治療を受けさせる
- ⑤保育上家庭と連絡を保つため保母は度々家庭訪問させる
- ⑥各方面にその父母を助ける

1905年、アダムスは人々の精神的な貧困を救うことを目的として、基督教講義所を開所した。また、失業者のためには授産部を開き、労働者の保護、救済も行われた。花をこの上なく愛でたアダムスは、花畑の子ども達の変化の兆しを次のように記述した。

「花畑に博愛会をつくりました当時は随分子供も粗暴で、会の敷地内に花を育てる為に草花の種を蒔きますと芽が出ると共に摘みとり、木を植えますと折り取ってしまうという始末でございましたが、其の後子供を教え導くことに相当苦心もいたしました但其の結果は案外良く4,5年後には子供の性質も一変してまいりました²⁴⁾

と子供達の変化を記した。

第3章 花畑施療所の開設と巡回看護をめぐって

アダムスは1905(明治38)年2月15日に施療所を開設した。アダムスの活動の対象者が幼少年から成年女子、失業者そして地域住民すべてに拡大していくにつれ、アダムスは病人や障害を持つ人たちを多く目にするようになった。アダムスは病人を見つけては、市内内山下にあった県立病院に連れて行き、治療費を支払って治療を受けさせていた。アダムスが施療所を開設した直接的な動機について、『岡山博愛会沿革誌』を見ると、

「貧困な母親が放任していた眼病の子どもを毎日県病院へ治療に行かせたが、効果がなく失明したこと、更に医療の受けられなかった妊婦が難産の末、母子共に死亡するという悲惨な出来事に遭遇したこと」

と記述されている。アダムスは治療の効果が表れてこないのを不思議に思い、家庭訪問すると、処方を守った形跡はなく目薬は放置されたままだった。翌日から続けてこの子供の家を訪ね、処置を行ったが、手遅れであった。アダムスは彼の将来を考え、失明した少年を神戸の知人に託した。この少年は後に「目は潰れましたが、心の目が開かれました」とアダムスの祝賀会の席でお祝いの詞を述べている²⁵⁾。

アダムスをよく知り、その活動に注目している人びとからアダムスの働きを瞥見する。

多久安信岡山県知事²⁶⁾は「女史の全生命を打ち込まれました事業は、児童及び婦女子の教化改善のために或いは学童就学のために、または貧困者生業扶助、救護救済のためにありとあらゆる最善の方法を選んで事業施設を行い、わが国における所謂近代隣保事業の草創として名実共にその実績を挙げることに専念従事されたのであります」²⁷⁾と語っている。

大森次郎²⁸⁾は「本邦最古のセツルメント岡山博愛会の顧望」としている。大森は1921年4月岡山県社会課に入り、同年10月から翌年3月迄花畑住民の生活状態調査のため同地区で毎日調査に当たった。又、大森次郎は岡山博愛会とセツルメントについて、次のように述べた。

「その後大正10年4月岡山県社会課に入り、同年10月から翌年3月迄花畑住民の生活状態調査の為、同地区に毎日入り込み始めて先生及其の一党の人達にも親しくお付き合いの機会を得るし、更に事業そのものにつきても詳細に学ぶことが出来た。当時本邦に於ける近代的社会事業の勃興初期に当り一般人は勿論事業関係者と雖も認識極めて浅く、今日から見れば誠に噴飯に値する如き論争に時を過ごしたこともある。従って漸く私たちの頭にセツルメント事業なる語が社会事業の一施設としての知識ではありながら、現実の岡山博愛会との関係には思い及ばなかったのです。1月と2月私の花畑に於ける生活状態

調査は進められ、次第にアダムス先生の事業の全貌が顕かにされるに至って、セツルメント事業とは大凡斯如きものならん確信を得るに至った²⁹⁾。

花畑における貧しい病人とアダムス

アメリカ人宣教師アダムスの初期の訪問看護はどのようなものであったか。看護婦免許取得前のアダムスの訪問看護活動についてのハロルド・W・ハケット（Harold W. Hackett）による Missionary HERALD の記事がある。少し長いが引用すると、「或る日、彼女の日本語の先生と一緒に家庭訪問をした時に、長い間只一人放置されていた病臥の人の家に行った。彼の容態は悲惨なものであった。彼の手の内側は、埃や垢に固まっていた。然し、こんな下層な人ですらも気を悪くさせてはならない。アダムスは、こんな緊急な場合のためにも用意していた消毒薬は非常によい香りがした。そしてコルクを瓶からはずして彼女は彼にその香りを嗅がせ、そして彼がその体に塗るように教えた。石鹸と手拭いが取り出された。たらいと水が手近にあった。彼女は躊躇せず彼の顔と手を洗った。こんな素朴な始まりからして、そのセツルメントの施薬救療事業は出発した。アダムスは、看護婦の訓練は受けていませんでした³⁰⁾。

アダムスは花畑地域を巡回することを日課としていた。「櫛と石鹸、チリ紙の入った袋をいつも手にしていた」アダムスに身体を洗ってもらったこの病臥の患者は、「気持ちよくきれいになったと喜んで大声をあげた」とハケットは記録している³¹⁾。アダムスが花畑で伝道と教育に携わってから 10 年目となる 1900 年、アダムスは来日以来初めて帰国した。帰国中、アダムスは博愛会事業への募金に歩き、また社会事業講習会に出席して広く新しい社会事業を学び来岡している。アダムスは看護婦としての知識の必要を感じ、日本赤十字社篤志看護婦人会（1887 年発足）の岡山支会（1904 年発足）の看護法講習を毎月 2 回通って、仕事の余暇に学び修業証書が授与され博愛会施療所での仕事の幅を広げた。

第 4 章 岡山博愛会における訪問看護活動

「岡山博愛会」はアダムスが 1905（明治 38）年 5 月「花畑施療所」を開設したのに始まる。アダムスは岡山にキリスト教を広めただけでなく、教育・福祉・医療などの多方面にわたる足跡を残したこの施設は後に総合病院に発展した。現在は病院を中心に居宅介護支援事業所、保育園、訪問看護ステーション、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、グループホーム、看護小規模多機能型居宅介護、介護医療院等の事業を展開している。岡山博愛会における訪問看護活動には以下の 5 点が特徴づけられる。

(1) アダムスが花畑を廻ることは日課の一つとなっていた。

「今ではそうでもございませんが、私が花畑の為に昼となく夜となく働いた当時は外出する時には必ず袋を手離しませんでした。袋の中には櫛と石鹸と塵紙位のものでした。近くに遊ぶ

子供の髪の乱れを見れば梳ってやりました。大変汚れた子供を見れば、早速洗ってやりました。鼻の出た子供があれば鼻も取ってやりました。其の為には常にこの品々は手離すことの出来ないもののみでございました³²⁾。

(2) 河本乙五郎岡山博愛会理事長によると、「博愛会が現在の地に其の根拠を礎へたのは1902(明治35)年の頃と思うが、その中央に先生の住宅1棟が新築され、ここを中心として日夕四隣の細民同胞を日夕訪問してその慰撫救済に貢献された³³⁾。絶えずアダムスを支援して、博愛会の困難な時期の経済的、運営から身寄りなくした花畑の患者の看護、家政婦のような仕事に至るまで貧しい人々の生活を改善するための奉仕活動を常とした。

(3) 1907(明治40)年頃の博愛会訪問看護

このころの彼女は地区内を自身で巡回し、今日の訪問看護婦、保健婦、ホームヘルパーのような役割の一部をも始め、地区民の健康を守ることに一生懸命尽した。

(4) 1918(大正7)年、本院では事務員、看護婦をして患家を訪問し、日常の生活状態及び其の病状を視察せしめ以て生計撰養両面に注意し夫々臨機の処置をとり、救療の上に万全を期していった。諸費用の点は一切之を徴収せず別に献金箱を設けて、各自応分の感謝献金をさせた。此の頃にして早くも訪問保健婦の働きを始めて居ったのである³⁴⁾と記述した。

(5) 1931(昭和6)年になっても、1918年と同様に事務員、看護婦でもって施療患者の家庭を訪問して、病者とその家庭の状況について観察を行い、必要とされる看護を行った。

保育園に関しても、保育上家族との連絡を密にする為に、保母は度々家庭を訪問して、幼児を取り巻く諸般の問題において母親をはじめ、その家族の援助がなされた³⁵⁾。

花畑施療所の施療について

「建築や薬品、機械の準備のために思はぬ日子を費やしまして漸く本年2月15日より施療所を開くことになりました³⁶⁾と、香堂生は「花畑施療所所感」に記している。

花畑施療所の施療は、明治時代既に、疾病の治療とともに家庭の福祉増進を目指してた。「看護婦や事務員に患家を訪問させて、療病以外に患家の経済生活にまで救護の手を延べているのは、施療院が病気の治療と共に、家庭の福祉増進を目指しているのはアダムスの体験に基づいた貴重なものである」と、更井も指摘している³⁷⁾。

アダムス発行の『四季のしらせ』第1号施療所開設当時の一人の患者の様子を次のように記述している。

「施療所開始当日すでに六名の患者が参りました。一方には私等の予想も及ばぬ様な惨めな事があり、それは一日のこと久しく病床に臥っている患者が往診を願って来たのであります。目下の処往診は出来ぬでありますから、何うにかして連れて参るやうに申しましたが、其の実病気の為歩行が出来ぬと云ふではありません。施療院迄参る衣類がないのでじゅばん一つで炬燵の中に這入り込んでいるのであると云ふことでありましたから、夫々衣類の斡旋をしてや

り漸く施療所に参ったのであります」³⁸⁾。

施療院退院と同時に患者はその日のパンを得るために重労働に就くため、アダムスは、退院に向けて入院患者個々の体力に応じて状袋、マッチ等製造・わら細工などの作業をやらせた。作業室は二室設けられていた。1907（明治40）年に施療院となった岡山博愛会は施薬施療の機能のみならず、リハビリテーション、作業療法などを取り入れた一連の構想の中には新しい医療への先駆的な思想すら窺うことができる。

1912年5月29日財団法人の認可があり、アダムスはその理事に就任した。また、この日より施療院、小学校、日曜学校、裁縫所及び保育園を『岡山博愛会』の総称のもとに置いて、アダムスは会長に就任した³⁹⁾。アダムスは教育、伝道は元より、施療院で看護婦として働いていたが、花畑の非衛生的な地域を巡回して、あらゆる患者と接し、病人に夜間も付き添い、不潔物の洗濯までアダムスの上にかかっていた。1914（大正3）年3月から1916年3月の2年間、結核の療養のため帰米する⁴⁰⁾。

わが国の訪問看護事業は明治期にその萌芽を見、大正時代になると、その充実が図られていく。岡山博愛会施療院の目的は「岡山博愛会施療院寄附行為」に次のように規定されている。

「第3条 本院ハ細民ノ病者ニ施薬救療ヲナシ其身心ニ慰安ヲ与フルヲ以テ目的トス」⁴¹⁾。

この日より施療院、尋常小学校、日曜学校、裁縫所及び保育園を岡山博愛会の総称のもとに置き、アダムスが会長に就任した。アダムスは過労のため、肺結核に感染し、1912年2月療養の為、神戸に赴いた。しかしアダムスの健康は好ましくなく、医師の奨めで帰国、療養した。これが3回目の米国帰国であった。1914（大正3）年から1916（大正5）年初春の間である1916年3月22日、健康を回復して50歳のアダムスは再び来岡できた。アダムスは施療所における救療事業の中で、「事務員と看護婦とでもって患者の家庭を訪問し、日常生活状態、病状の観察、生計と摂養（からだを養う）両方面に注意し、適切な処置を行い患者の救療上遺漏のないように行うこと」⁴²⁾と規定している。博愛会における家庭訪問は施療部内だけでなく1910年に「細民労働者のため其の児女を保育教養すると共に其父母をして安じて生業に従事せしむるにあり」⁴³⁾とする目的でもって開園された保育園においても「保育上家庭と連絡を保たんが為保母をして度々家庭を訪問せしめて各方面にその父兄を助けしむ」⁴⁴⁾と記されており経済的なこと、人間関係、健康、教育、どんな方面の問題でも保母を通じて援助する旨が謳われている。

このセツルメント事業は社会事業のデパートメントストアーと評されることもある。

「私は忙しい身体でしたが、暇をつくっては家庭訪問をいたしました。日曜日は定期的に必ず家庭訪問をすることに決めていました。其の家庭訪問の結果娘を遊郭から救い出したことがございます。」花畑尋常小学校に通う娘達を父親が遊郭に売った事例が『アダムス女史一夕話』の中に記録されている⁴⁵⁾。いずれもアダムスは家庭訪問によって直面している家族の危機に

気づき、救出している。また、アダムスは夫に死別した3人の子を連れた母親は、上2人を連れて仕事に出かけ、末っ子の小学4年生をアダムスに預けて、労働に出かけた。アダムスはこの娘を引き受け、高等女学校まで卒業させて、結核性の病気も治療させ、結婚させ幸な家庭を築いている事例もある。

1923(大正12)年頃内務省囑託であった相田良雄⁴⁶⁾は田子一民社会局長の地方の視察に随伴して花畑を見たことがある。

「その時の花畑の変わり方は昔の物語にはあったかも知れぬという位であった。そして私をして感涙を催さしめたのはアダムス女史に藍綬褒章が下賜せられ、その祝賀会の光景であった。此の時花畑の人達が誰も勧誘したのでもないのにお饞別として2銭、3銭、5銭、10銭を鼠色の状袋に入れて思い思いに持って集まられたことは何とも言えぬ美しいことであった。金額の多少でなく、その人々の厚意は尊いものであった。そしてアダムス女史の挨拶も深い感興を与えた。」「お国の諺に遠い親族よりも近い他人ということがある。私の親族は遠いアメリカにいて世話になれないが近い所の皆様から親族以上の厚意を受けることはまことに感謝に堪えない。此のたび日本皇室から私に藍綬褒章を賜ったが、これは私一人の受くべきものでなく皆様の受くべもので、私は只博愛会を通じて皆様を代表して居るに過ぎない。この尊い褒章は1つしかないが皆様も皆様の胸にかけてあると思ひ、共にこの名誉を傷つけないように努めたいと思う」と述べられた。

アダムスのこの岡山花畑最後の日の出来事であったが、45年の間、花畑の人びとを看護婦でもあり、セツラーでもあって親しい同胞として、アリス・ペター・アダムスは彼らと共に生きてきた生活の中から、人々の生業を大切にして、人の心と地域が居心地良く変化した場所であるという気付きを与えたのではないだろうか。

「指折り数ふれば四年前現在の場所に移転せし当時には園中の草花は門を嚴重に閉さねば常に何人かに摘み去られて跡片もなかりしが、過ぎし年月忍耐以て教え導きし結果、今日此の頃校門は開放して花の盛りにも一として荒らさるることも無く近隣の人に校門は開放せられて美花の眺めを恣にするを誇りとなすに至れるもうれしく云々」と書き、尚筆を続けて、「多数の人の集会の終わりには児童必ず『先生私の下駄がありません』との訴え塵、なりしが、今は改りて其の憂いなく彼らの念頭には僻令些かの悪事にも発見せらるるとせられざるとに不拘悪事なりとの観念のもだえなり萌也是も改善のしるしなり。云々」⁴⁷⁾

とある。『四季のしらせ』より1905(明治38)年5月アダムスが花畑の地域の人々と日々共に生活していく中で影響を与え人々の心を開拓した様子がうかがわれる。アダムスが最初、居住した当時の花畑については、先に叙述しているが、アダムスのこの地域の人々への日々の活

動は、人心の変化すら生じさせた。アダムスは「私は忙しい身体でしたが、暇をつくっては家庭訪問を致しました。日曜日は定期的に必ず家庭訪問をすることに決めていました」⁴⁸⁾。

従来、わが国における訪問看護史の上では、岡山博愛会のアダムスによる訪問看護事業については殆ど紹介されて来なかった。しかし、これまでみてきたように1905年に施療所が開所され、看護婦は1~2名で多くの施療患者の看護と訪問看護、入院患者（年間2~12名）の看護が行われていた。博愛社の救療、教育諸事業はたえず困難な経営状況であったが、アダムスは過労、結核、乳癌など自らの病気を克服して、生涯にわたって貧困な病者への施療とその家庭の保護を行っていた。1918（大正7）年10月には流行性感冒（スペイン風邪）が岡山県下を襲っている。医療面について述べると事務員と看護婦で患家を訪問し、日常の生活状態、その病状を観察させ生計、摂養両面に注意させた。1918年の頃を見ると博愛会ではこの時期に訪問看護、訪問保健婦の活動を早くも開始していたと記述されている。

当初、岡山におけるアダムスの事業は誤解や中傷を受けたが、J・C・ベリー、ケリー（Cary, Jr., Otis）など明治初期から救療活動を通じて人々に貢献していたアメリカンボードの宣教師に寄せていた信頼感を岡山の人たちはアダムスの事業にも寄せた。アダムスの救療事業は協力者を得て、発展・継続されている。また、その事業には皇室・宮家御下賜金と奨励金、国、県や市等の補助金助成などもなされるようになり、1923（大正12）年には、アダムスに藍綬褒章が授けられた。アダムスは1935年10月第8回全国社会事業大会で、社会事業功労賞を受けた。1936年には勳六等瑞宝章を下賜された。

結びにかえて

以上論じてきたように岡山博愛会はアダムスが1905（明治38）年花畑施療所を開設したのに始まる。アダムスは岡山にキリスト教を広めただけでなく、教育・福祉・医療などの多方面にわたる足跡を残した。その点でキリスト教伝道と社会事業とを併せ持って展開した。岡山博愛会の医療関係施設は後に総合病院に発展し、現在は病院を中心に居宅介護支援事業所、保育園、訪問看護ステーション、特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、グループホーム、看護小規模多機能型居宅介護、介護医療院等の事業を展開している。

本論文で明治中期にアメリカン・ボード宣教師らによって始められた訪問看護の前史を辿る中で、アリス・ペター・アダムスによる岡山博愛会のセツルメント事業の中でなされた先駆的な訪問看護の実践を見ることが出来た。アダムスのセツルメント事業は種々、特徴を持っているが、中でも地方にあって培われた基督教の信仰を内に秘めた人々に支えられ、アダムスが花畑のいと小さい者へなした愛の奉仕者としての歩みは現在も社会福祉事業として、創始者アダムスの魂と共に歩んでいる。

戦前日本における訪問看護の歴史を掘り起こしていくとき、制度として定着したもの、ある

いは様々に違った形態、あるいは未来に於いて可能性を残した小さなもの等々、その形態は様々である。そして、病院や福祉の事業から行われたもの、あるいはセトルメント事業の一環としてスタートしたもの等々、いずれにおいても様々なケースにおいて、その可能性の追求が実証的に必要であると思われる。そうした可能性のある小さな川、或いは伏流がいずれ大河となり、制度として定着していくのであろう。岡山博愛会でなされたものは小さなものであったかもしれないが、訪問看護の歴史の濫觴として我々の心の内奥に記憶されていかなければならないものと思われるのである。

総務省の推計によれば2021年、わが国における高齢者数は3,640万人であり、高齢化率は29.1%である。現今の少子高齢社会にあって、訪問看護事業はその需要をとみに増してきており、人びとが住み慣れた地域で、在宅における医療・介護など一連のケアが継続して享受できるよう、住民ニーズに寄り添っていくことの出来る地域社会の実現について思いを馳せる時、本論文で記述した岡山博愛会におけるアリス・ベター・アダムスの足跡はきわめて重要である。

〔注〕

- 1) 更井良夫『岡山博愛会 100年史』岡山博愛会(1991年) 328頁。
- 2) 徳川早知子「日本訪問看護制度前史の研究 岡山におけるアリス・ベター・アダムスとその活動」『日本看護歴史学会誌』第12号 2001年所収。
- 3) 更井良夫(1908年4月12日生-2000年3月15日没)吉備郡に生れる。1933年同志社大学文学部神学科を卒業。伝道師を経て1934年岡山博愛会主事、保育園長。1950年岡山博愛会会長就任。著書に『みわごのあと-岡山博愛会75年史』『社会福祉法人岡山博愛会100年史』『岡山県の生んだ四人の社会事業家-留岡幸助、石井十次、山室軍平、アリス・ベター・アダムス』。1990年『信仰 希望 愛』など。
- 4) 病氣と70歳の宣教師の定年のため、アダムスの帰国が決まったある朝、更井が彼女の部屋を訪れた時その書棚に10冊以上の日記帳のあるのを見て、更井は残してほしいと、訴えたが、アダムスは拒否し、翌朝までにすべて焼却してしまったという。アダムスの此の行為から更井は博愛会での45年の苦難に満ちた活動の跡をすべて神の御栄光に帰した深い信仰と愛によって支えられてきたのだと気付いたのではないだろうか。
- 5) ハロルド・W・ハケット「社会奉仕の母」この文章は『連帯時報 追悼号』1937(昭和12)年7月所収。
- 6) 1893年リリアン・ウオールド(1867-1940)はマリー・M・ブリュースターと共にニューヨークイーストサイドに移住して貧しい人々の生活を改善するため訪問看護活動を始めた。これより先、アメリカにおいては1899年にアダムズ(Adams, J.)が設立したハルハウスが最初のセトルメントであった。
- 7) フローレンス・カーブ Florence Cobb, 同志社女学校専門部英文科教授。「アダムス女史の幼年の頃」『連帯時報』第16号 岡山県社会事業協会。
- 8) 『岡山県史』第10巻 近代I 岡山県史編纂委員会(1985年) 548頁。
- 9) 『岡山博愛会100年史』更井良雄(1991年) 328頁。
- 10) 横山憲勝『アダムス女史一夕話』岡山県社会事業協会(1933年) 72頁。
同書発刊に際して岡山県社会事業協会横山憲勝は「一夕係員をして謙遜される女史に乞いて其の苦

岡山博愛会におけるアリス・ペター・アダムスの訪問看護活動（徳川早知子）

心の跡を聞かしめ、更によく女史を知る人々より材料を蒐め、之を便宜上 女史の談話体に統一して編集せるものであるが、勿論女史の断片を載せたに過ぎない。本書成るに当たりては、坂本義夫氏夫妻並小野田元氏に追う所多大なりしを識し感謝の意を表す。」と記している。

- 11) 前掲書 74 頁
- 12) 『四季のしらせ』岡山博愛会の機関紙として 1905 年 5 月 31 日創刊され、1912 年から『岡山博愛会年報』と改称され、1942（昭和 17）年より発行不可能となる（不急不要の印刷物と見られたため）。
- 13) 『アダムス女史一夕話』74 頁「道に寝て宿料を払う」による。
- 14) 前掲書 75 頁。
- 15) 更井良夫『みわざのあと 社会福祉法人岡山博愛会 75 年史』岡山博愛会発行（1966 年 11 月）75 頁。
- 16) アダムスは明治 29 年岡山基督教会員であり、教員資格のある小野田元を学校の責任者として小学校設立の願書を市役所に提出した。小野田は同校校長として 11 年 2 ヶ月在職した。また、伝道師兼小学校教師として、同志社卒業の三谷公一を招いた。教育の特徴は麦稗真田の製造など実学教育であった。
- 17) 『アダムス女史一夕話』78 頁。
- 18) 「花畑では 10 歳以上で工場に出せば幾何かの労銀を儲けるので、父母が退学させ、これを工場に送る」と、小野田も生徒募集と修学継続の困難さを記述している。『岡山博愛会 100 年史』346 頁。
- 19) 更井良夫「賭博常習者の家庭」『アダムス女史一夕話』86 頁。
- 20) 『アダムス女史一夕話』76 頁。
- 21) 更井は幼稚園事業中止の理由は明らかではないとしている『岡山博愛会 100 年史』65 頁。
- 22) 前掲書 67 頁。
- 23) 更井良夫『みわざのあと』（1910 年）7 頁。
- 24) 更井良夫『みわざのあと』（1910 年）90 頁。
- 25) 『アダムス女史一夕話』78 頁。
- 26) 多久安信（1890 年 - 1959 年）佐賀県出身、内務・警察官僚・東京市助役等を経て、第 25 代岡山県知事。知事就任任期は 1934（昭和 9）年 8 月 11 日～1937（昭和 12）年 7 月 7 日。
- 27) 多久安信「アダムス女史の功績を頌えて」更井良夫『岡山博愛会 100 年史』（1991）331-333 頁。
- 28) 大森次郎（1890 年 - 1978 年）。なお長男である大森明彦氏による「父の思い出」『大森次郎翁を追憶して』私家版（1956 年）がある。
- 29) 調査の最初に当たって、大森はセツルメント事業と現実の岡山博愛会の関係が明確が実感できなかった。しかし、花畑での生活実態調査が進められるに従い次第にアダムスの事業の全貌が顕かにされ、彼はアダムスの博愛会事業がセツルメントであるという確信をもった。大森は『岡山県之社会事業』地方改善号 1922 年 1 月号 68-70 頁に始めて博愛会を本邦最古の隣保事業として紹介している。
- 30) 施療所には看護婦を置くことが必要であった。そのためアダムスは日本赤十字社岡山支部による篤志看護婦講習を受け、県立岡山病院で看護の実習を行い看護婦資格を得た。
- 31) ハケットによる「社会奉仕の母」は The Missionary HERALD May 1937 は更井『みわざのあと』1966 年 100-101 頁所収。
- 32) 『アダムス女史一夕話』5. 「女史と子供」289 頁。
- 33) ハロルド・W・ハケット「社会奉仕の母」更井『みわざのあと』（1966 年）101-102 頁所収。
- 34) 香堂生『みわざのあと』（1966 年）217 頁。
- 35) 更井良夫は『岡山博愛会 100 年史』へ当該記事を抜粋して 217 頁に所収。
- 36) 香堂生「花畑施療所所感」『四季のしらせ』第 1 号（1905 年 5 月 31 日）217 頁。

- 37) 『みわぎのあと』 217頁 香堂生 (1966年) 岡山在住の医師あるいは歯科医。詳細不明。
- 38) 『四季のしらせ』 第1号 (1905年5月) 217頁。
- 39) 坂本義夫『アリス・ペター・アダムス年譜－岡山博愛会沿革誌－』 (1931年) 70頁。
- 40) 前掲書 64頁。
- 41) 第二十条よりなる岡山博愛会施療院寄附行為第三条 (明治45年5月13日付で申請した岡山博愛会施療院設立認可申請は5月29日付で許可された。)
- 42) 『みわぎのあと』 11頁。
- 43) 前掲書 7頁。
- 44) 児玉源喜「生業扶助と保育事業」『みわぎのあと』 1911年2月6日号より所収 121頁－122頁。
- 45) 『アダムス女史一夕話』 87頁－88頁。
- 46) 相田良雄 (1870年4月13日－1955年5月22日)。内務省地方局嘱託として全国各地の社会施設を視察・調査・指導している。
- 47) 『アダムス女史一夕話』 90頁及び92頁。
- 48) 『四季のしらせ』 第2号 (1905年7月) 92頁。

※2002年の保助看法の改正により保健婦、助産婦、看護婦は保健師、助産師、看護師と名称変更がなされた。本稿では歴史的用語として使用する場合は、当時の表現を用いる。

【参考文献】

- 赤澤乾一『財団法人岡山博愛会沿革誌』創立50周年記念出版 岡山博愛会 (1941年)
- H. W. ハケット「米国における故ミス・アダムス」『連帯時報』18(1) (1938年)
- 守屋茂「都市隣保事業の濫觴たる岡山博愛会」「岡山県の主なる民間社会事業」 (1960年)
- 室田保夫「明治中期におけるキリスト教慈善事業の展開」『日本キリスト教社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房 (2014年)
- 西内潔『日本セツルメント研究序説』童心社 (1971年)
- 日本赤十字社岡山支部『日本赤十字社岡山支部100年略史』 (1988年)
- 大国美智子『保健婦の歴史』医学書院 (1978年)
- 大林宗嗣『セツルメントの研究』日本図書センター (1996年)
- 大森次郎「本邦最古のセツルメント岡山博愛会の願望」『連帯時報』16(9) (1936年)
- 岡山博愛会『大正八年度岡山博愛会年報』 (1919年)
- 岡山博愛会『昭和六年度岡山博愛会年報』 (1931年)
- 岡山県社会事業協会編『アダムス女史一夕話』 (1933年)
- 岡崎祐司「医療・介護難民をつくらぬ地域包括ケア」『月刊保団連』 (2014年)
- 岡崎祐司「人間の生とケアの社会理論－ケア政策の研究の前提として－」『佛教大学社会福祉学部論集』第15号 (2019年)
- 齊藤潔「保健指導婦事業の発達史2」『社会事業』24(25) (1940年) 61頁
- 坂本義夫編『岡山博愛会沿革誌』 (1932年)
- 更井良夫・美子『みわぎのあと 社会福祉法人岡山博愛会七五周年史』 (1966年)
- 更井良夫『岡山県の生んだ四人の社会事業家』日本基督教社会事業同盟 (1973年)
- 更井良夫『社会福祉法人 岡山博愛会100年史』 (1991年)
- 更井良夫『信仰・希望・愛』私家版 (1999年)
- 更井哲夫「アダムス女史」『日本の教育 岡山の女子教育』吉備人出版 (2006年)
- 徳川早知子「日本訪問看護制度前史の研究 岡山におけるアリス・ペター・アダムスとその活動」『日本看護歴史学会誌』第12号 (2001年) 75頁～92頁

岡山博愛会におけるアリス・ペター・アダムスの訪問看護活動（徳川早知子）

〔アリス・ペター・アダムス略年譜〕

- 1866（慶応2）年 米国ニューハンプシャー州 Jaffrey に生れる（8月3日）
- 1880（明治13）年 ジャフレ町コーナント・ハイスクール（中等学校）入学→1883年同校卒業
- 1885（明治18）年 プリッジウオータハイノーマルスクール（高等師範）入学
- 1887（明治20）年 寄宿舎の同室の友人と将来10年間神と人のために奉仕しようと誓い合う
- 1889（明治22）年 同校卒業（2月）コーナント・ハイスクール校長就任（9月）
- 1891（明治24）年 American Board of Commissioners for Foreign Missions の宣教師に任ぜられ
来日。岡山 J・H・ペター博士宅に寄寓（5月1日） 南部安息日学校出席（5月3日） クリスマ
スの祝日に花畑方面の子供たちを集めて祝会を開いた（12月25日）
- 1896（明治29）年 花畑尋常小学校開設（10月28日）
- 1899（明治32）年 基督教講義所設立認可
- 1900（明治33）年 アダムスは来日後、初めて休暇で帰米する 帰米中は慈善事業の視察、見学、研
究を行い募金活動。『創立65周年記念岡山博愛会沿革誌』4頁
- 1901（明治34）年 岡山博愛会創業満10年。アダムスは帰国中、3月から7月までスプリングフィ
ルドのノーマルバイブルスクールで社会事業講習を受ける 再岡（9月）
- 1902（明治35）年 アメリカン・ボードからの寄付金で花畑37番地の土地を購入して、12月花畑尋常小
学校を移す。花畑裁縫夜学会設立（12月）
- 1905（明治38）年 校舎新築落成（2月） 花畑施療所開始（2.15） 花畑キリスト教講義所設立（2月）
施し風呂設置（5月）『四季のしらせ』第1号創刊 日本赤十字篤志婦人会より看護学校修了証書
を下付
- 1906（明治39）年 幼稚園を附設（6月） 関西中学校教師嘱託（9月） 愛の饗宴（12月）
- 1907（明治40）年 地区内を自身で巡回訪問看護婦としての務めを始めた
- 1908（明治41）年 第1回相談委員会を開き花畑施療院規則を協議決定する
- 1910（明治43）年 保育園を開始（10月15日）この日より施療院、小学校、日曜学校裁縫所および
保育園を岡山博愛会の総称のもとに置き、アダムスが会長に就任
この日創立20年記念祝賀会を挙げる 内務省派遣の同省嘱託生江孝之の記念講演があった
- 1911（明治44）年 アダムス社会事業満20年。この日、内務省より400円を2月11日、11月3日
更に500円を、いずれも助成金として下附された。市補助金100円（4月4日）その後増額。
1928（昭和3）年度より800円となる
- 1912（明治45）年 病氣療養のため神戸に赴く『四季のしらせ』第28号を終刊として、『岡山博愛会
年報』を出すこととなる（2月12日）財団法人の認可あり。アダムスその理事に就任（5月29
日）
- 1914（大正3）年 アダムス病氣療養のため帰米（3月9日）
- 1916（大正5）年 アダムス帰岡（3月22日）満5年記念祝賀式挙行（11月11日）
- 1920（大正9）年 Dr. James H・Petree 本国にて永眠（2月18日）
- 1923（大正12）年 アダムス藍綬褒章を受ける（2月24日）アダムス帰国（7月）保育園を廃し11
月1日幼稚園を開始する
- 1924（大正13）年 アダムス帰岡（11月26日）、渡米中の1ヶ年各所に社会事業の研究視察を行う
- 1927（昭和2）年 恩賜財団慶福会より事業助成金として3,000円の交付があった
- 1929（昭和4）年 小学生徒に昼食を与える（7月1日）財団法人岡山県社会事業協会より施療院及
設備費として金500円助成 本館の新築及び旧館の改造に着手（8月）
- 1931（昭和6）年 創業満40年3月下旬、アダムス帰米。昭和6年末までの救療患者36,972人、延
人員638,094人 小学生徒男子513人 女子556人 合計1,069人 財団法人岡山博愛施療院を
財団法人岡山博愛病院と改称（2.17）

- 1932 (昭和7)年 アダムス帰岡 (6月8日) 明治43年10月保育園開設し14年後中止し幼稚園のみとして経営していたが、日本より保育園を開設して地区の託児事業を再開した。
- 1933 (昭和8)年 労働部授産所開始 (1月30日)
- 1934 (昭和9)年 博愛会尋常小学校閉校 (3月24日) セツルメント・アダムス記念館建設計画
- 1935 (昭和10)年 更井良雄が主事の任に就き、アダムスを支え地区住民の保健衛生に貢献した
- 1936 (昭和11)年 アダムスは乳がんの診断を受けた。上京し聖ルカ病院で手術を受ける
勲六等瑞宝章下賜 (5月19日)あり、5月23日下賜。定年を迎える (8月3日)
財団法人岡山博愛会病院寄付行為変更認可申請が9月15日認可 (財団法人岡山博愛会となる)
神戸港より帰国の途につく。カープ夫人付添う (9月17日) 帰国後は、ボストン郊外のニュートンの
ナーシングホームで手厚い医療・看護を受け、親戚や知人らが度々見舞う
- 1937 (昭和12)年 喜びと慰めのある療養生活を送った。アダムス5月9日永眠
アダムス理事辞任し、小川列三郎氏後任

〔付記〕

アリス・ペター・アダムスの生涯については、既に多くの博愛会に連なった人々によって語られているが、略年表作成において『アダムス女史一夕話』を基本に用いた。また、坂本義夫著「アリス・ペター・アダムス女史年譜－岡山博愛会沿革誌－」『連帯時報』第16巻第9号および、更井良夫編集の『みわざのあと 社会福祉法人岡山博愛会七十五年史』更井良夫編『岡山博愛会100年史』、池田敬正・土井洋一編『日本社会福祉総合年表』等を参照した。

(とくがわ さちこ 社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程)
(指導教員：岡崎 祐司 教授)
2021年9月30日受理